

第二十九章 鯛湾

ようやく特急ウク・ライナーがイリ王国から中華民国内の最初の駅「熱烈歓迎駅」に到着する。名前の割には静かな駅でホームは閑散としている。ほとんど乗客がいないから下車する者も少ない。それでも駅弁の売り子が威勢のいい声を上げて車窓に近づく。

シルクロード一路条約で国際特急列車は自由に国々を移動できる。しかも要所のレーン・ポイントが列車側でコントロールできる。つまり国際特急列車側で進路を自由に設定できる。もちろん事前通告してダイヤを乱さないように配慮しなければならない。急に変更するときにはそれなりに待機しなければならないが、今回の特急ウク・ライナーはウクライナ共和国の首都キープを出発したときに目的地を新疆ウイルス自治領の首都ワクチンと報告していた。

それなのに人民拘束軍が目的地変更を要求してきた。明らかに条約違反で特急ウク・ライナーは自らポイントを切り替えてワクチン駅に向かうことができる。しかし特急ウク・ライナーの運転手や車掌は強行せずこの駅で待機することにした。

*

「この駅弁、結構いける」

意外とイリは冷静に事態を正視する。原発饅頭の刺激的な味と異なりに嫌気が察したのか熱

烈歓迎駅の中華料理駅弁は非常にうまい。そのとき特急ウク・ライナーの横に特急ドラゴン・ライナーが入線する。相変わらずものすごい勢いで大量の白い蒸気を吐きだす。すぐ周りが見えなくなる。

「失礼なヤツ」

「イリ様。お言葉をおつつみしなされ」

車内も蒸気のせいか何も見えなくなる。煙ではないからむせることはないが息苦しい。

「失礼にもほどがあるわ。すぐ出発します」

特急ウク・ライナーが動き出す。

「新疆ウイルス自治領行きの許可が出たのかしら」

車内放送が始まる。

「行き先を変更します。次は『鯛湾、鯛湾』」

「えー！」

イリが驚いて弁当を落とす。その弁当を拾い上げてイリに差し出す者がいる。いつの間にか蒸気は消えて視界がはっきりする。もう一度イリが驚く。ほとんど空っぽだった車内がほぼ満員になっていた。

「イリ女王様。いえ、大総統イリ様。驚かせて申し訳ありません。我々はウイルス族です。と言うより組織グレーデッドに身を捧げた者たちです」

「グレーデッドの残党？ やはり居たのね。皆無事なの」
返事を待たずにイリが続ける。

「ノロと地球を出たとき一緒に来なかったグレーデッドの人々構成員がどうなったのかとても心配したわ。ノロは『何とかしているさ』と平然としていたけれど……」

イリの語調が少し弱くなったのを見計らって弁当を手にする者が苦笑いする。

「心配は無用です。でも地球はごらんのとおりで。言い訳をするつもりはありませんが、皮肉なことに世界中に独裁者が台頭しました。何とかしようと努力していますが、うまくいきません。どうかお力をお貸しください！ イリ大總統様」

イリは驚きの余りへなへなと席に座る。そして手渡された駅弁を食す。喉に詰めながらも胃に押し込む。長老からお茶を受け取ると流し込む。残党たちはそんなイリを尊敬のまなざしで見つめる。まったく動じないと思ひ込んだのだ。

「さて、みなさん」

咳き込みながらイリがかすれ声を上げる。

「まず、もう私は大總統ではありません。それにイリ王国の女王でもありません」

しかし、誰も否定したり意見を挟む者はいない。勝手に大總統をやめて一部のグレーデッドの構成員を引き連れてノロと共に宇宙に打って出たことに恨みを持ちたり否定したりする者はいなかった。一緒に行けば良かったなどと未練がましい言葉もなかった。

「どうやら誰もがイリを大總統とあがめているような雰囲気だ。プチレンコン大統領がうらやましがるとはイリの人気だ。」

「この特急ウク・ライナーに居る限り急ぐ必要はありません。今後のことすべて大總統にお任せしますのでよろしくお願い申し上げます」

このとき数人の若い女性乗務員とあの頭部全体が毛むくじやらの車掌が駅弁を満載したカートを押して車内に入ってくる。女性乗務員が駅弁を一人一人ていねいに配る。

「まずは腹ごしらえを！」

車内に歓声が沸く。すでに食事を済ませたイリは興味深く様子を観察する。かつてグレーデッドで活動していた科学者たちが今、無邪気に駅弁をほおぼる。

新疆ウイルス自治領で潜伏していたが人民拘束軍の執拗な介入を受けた。それでも証拠がないので人民拘束軍はウイルス族の弾圧に踏み切る。その弾圧がエスカレートしたのでグレーデッドの残党は新天地を目指さざるを得なかった。もちろんその残党は新疆ウイルス自治領のみに潜伏していたわけではなかった。

拙著の「トリプル・テン」シリーズでこの辺の事情を詳しく記述したが、グレーデッドは元々様々な人種の集団だった。特に多かったのは中国系の人々だった。第一次世界大戦で中華民国の前身の中華清国を列強各国が植民地化しようと虎視眈々と狙っていた。そうはさせまいと集まったのが平和を重視したりベラルな人々だった。ただしその後この崇高な考えを持った人

たちをある独裁者が乗っ取った。グレーデッドの不幸な歴史が始まった。

ともあれ、彼らは特急ウク・ライナーに乗り込み新天地を目指すことになった。その計画に特急ウク・ライナーが組み込まれていると気付く者はいないし、イリも呑気に次の駅弁が何かと思う程度でやがて満腹感から眠ってしまう。

*

覚めても周りは真つ暗闇で「もう一度寝ろ」と言わんばかりの暗黒の車窓だった。窓ガラスは鏡のようでスツピンのイリの顔を映している。それでも唇はやほほは少女のように赤く瞳は輝いていた。

このときアナウンスが流れる。

「まもなく『鯛湾、鯛湾のタイペイ駅です。ご存じのことと思いますが、鯛湾、特に首都では現金は使えません。すべてタイペイでの決済となります。アプリをインストールして車内でスマホにチャージしてください。チャージしないと下車できません」

イリはスマホを取り出すと素早く操作する。長老はスマホを近くにいるグレーデッドの女性に手渡して頭を下げる。そんな長老を見ながらイリは誰構わずに質問する。

「鯛湾は島国。どうやって特急ウク・ライナーは海を越えたの？」

長老に先ほどの女性がスマホを返してから平然と答える。

「海底トンネルで大陸と繋がっています」

イリは呆気にとられるがすぐさま次の質問を発射する。

「じゃあ、なぜ中華民国は鯛湾海峡で軍艦を繰り出して脅しを掛けるの？ トンネルがあるのなら、なぜ戦車を繰り出さないの？」

「このトンネルは特急ウク・ライナーや特急イリ・ライナーのような特に許可された列車しか通行できないのです。ドラゴン・ライナーには通行権はありません。特急の「特」は特別に許されているという意味なのです。急行より速く走ると言うことではありません」

特急ウク・ライナーが速度を落とす。外が急に明るくなる。トンネルを抜けるとそこは活気に満ちた明るい駅だった。